



大阪府立北野高等学校図書館

第 1 号

2008.5.9発行

図書館のカウンターに座っていて、貸し出しが多い日は幸せな気分になります。1年間で100冊以上本を借りて読む人がいる一方で、1冊も借りたことがない人もいます。図書館では多くの本達が借りてもらえるのを待っています。時間がないとか、最後まで読み通せそうにないとか考えずに、とりあえず借りてみてほしいと思います。

今年度も「図書ニュース」は年間6号を出す予定です。その中で、本校の図書館にある本を中心にいろいろな本の紹介をしていきたいと思います。担当者は毎回変わります。本の後にある【019／T2／1】などという記号は図書館での請求番号です。

今回は特集として「新書」をとりあげます。新書というネーミングはおそらく「古典」に対して新しい本ということから来ているのでしょう。かつて、「文庫」が人類の古典として必読書のリストだったのに対し、「新書」は現代のいろいろな問題についてコンパクトに知識を得ることができる便利な本として生み出されたものと思われます。

「新書」はタテ17.5センチ、ヨコ10.5センチというサイズにほぼ統一されています。だから、このサイズの本が新書だということにもなります。

現在、新書は多くの出版社から出されていますが、「岩波新書」と「岩波ジュニア新書」という2種類の新書は本校図書館にすべてそろっています。

授業でレポートを提出しなければならない、大学の小論文入試に備えなければならない、そういう時にも新書は強い味方です。

では、膨大な数の新書の中から、ほんの何冊かをとりあげて紹介しましょう。あとは自分で豊かな新書の森に分け入って下さい。

①坪内祐三「新書百冊」(新潮新書)【019／T2／1】

この本のカバーにはこういう言葉が記されています。「一人の青年の燃える向学心に数々の新書がいかに応えてくれたことか」。筆者が若き日に次々と読破した好きな本・凄い本・お得な本・秘蔵本まで百冊の思い出を熱く語った本です。コンパクトな外形の新書の世界がいかに広くかつ深いかが実によくわかる本です。

②平野啓一郎「本の読み方 スローリーディングの実践」(PHP新書)

【019／H5／1】

筆者は京都大学経済学部在学中に『日蝕』で芥川賞を受賞し、三島由紀夫の再来として注目を浴びた人です。2年生は1年時に現代文の授業でこの人のエッセイ「無常ということ」を勉強したのを覚えていることでしょう。小林秀雄の「無常といふこと」と同じタイトルを持つ、実に刺激的な京都論でした。

本を速くたくさん読みたいというのが多くの現代人の願いだけれど、筆者は逆に、10冊の本を闇雲に読むよりも1冊を丹念に読んだ方が人生にとってはるかに有益である、という立場からこの本を書いています。

本を読み慣れている人よりも、本をどう読んだらいいかわからないという人にとって役に立つ本かもしれません。取り上げられている本は、漱石の『こころ』、鴎外の『高瀬舟』、カフカの『橋』、三島由紀夫の『金閣寺』など8作品です。

③道浦母都子「女歌の百年」(岩波新書)【911／M26／12】

筆者の道浦さんは本校78期の卒業生。今や、現代の代表的な歌人といっていい存在です。2006年11月に本校で行われた道浦さんの講演(第36回六稜トークリレー)はすばらしいものでした。詩人らしく、ひとつひとつ言葉をていねいに選びながら話す、その語り口にすっかり魅了されました。

与謝野晶子の『みだれ髪』が刊行されたのは1901年。この本は、それから今日までの百年間に詠まれた女性歌人のさまざまな作品と生涯を辿りながら短歌の魅力を語っています。

高校の国語の教科書でとられる文章や詩には男性の作品が圧倒的に多く、短歌の場合も、取り上げられる女性歌人は限られています。この本を読むことで、女性がこの百年間どんな思いで生き、それを歌に表現してきたかということを知り、励まされる人も多いと思います。

④多木浩二「スポーツを考える」(ちくま新書)【780／T6／1】

筆者の文章は大学入試に出題されることが多い。内容のおもしろさもさることながら、この人の文章のむずかしさが試験問題として出題するのに都合がいいという面もあるように思われます。

それはともかくとして、スポーツが現代の社会において、単なるスポーツとしての枠を越えた巨大な現象となっていることは明らかなです。スポーツについて考えることが現代の複雑な社会の謎を読み解くことに通じるといってもいいくらいです。筆者は、スポーツを起源にまで遡り、今日までの変遷をたどりながら、その本質を明らかにしていきます。内容は高度で、文章もやさしくないが、読んでいて知的な興奮をおぼえる本です。

⑤双葉三十郎「ミュージカル映画 ぼくの500本」(文春新書)

【778/F1/2】

映画は素晴らしいし、音楽は美しい。この二つがいっしょになったら楽しくないはずはない。いいミュージカル映画を観ると本当に幸せな気分になります。ミュージカルといえばやはりアメリカが本場、ジーン・ケリーやフレッド・アステアの活躍する映画がすぐに思い浮かびます。音楽だけでなくダンスのすばらしさにも目を奪われます。

筆者の双葉さんがこれまで観た映画は2万本を越えるそうですが、その中で狭義のミュージカルだけでなく音楽映画ということで500本が選ばれています。こんなにあるのか！とおどろく人もいることでしょう。通読するような本ではないので、レンタルビデオを借りる時の参考にしたらいいいと思います。各作品に筆者による5点刻みの評点がついているので、評点の高いものの中からおもしろそうなものを選ぶことをおすすめします。

音楽映画のなかで、僕のお気に入りの1本は『シェルブールの雨傘』。これはミュージカルというよりオペラに近い。というのも、歌だけじゃなく、全てのセリフが歌われるからです。色とりどりの雨傘を真上からとらえた冒頭のシーンから始まり、音楽の美しさ、撮影の見事さ、ストーリーの哀切さ、どれをとっても文句のない出来です。

⑥丸山真男「日本の思想」(岩波新書)【121/M9/1】

新書の中には出版されてから何十年もたつのにずっと読み継がれているロングセラーや定評のある古典的名著というものも少なくありません。この本などはそういう本の代表格とっていいでしょう。1961年に出た本ですが、今日まで80刷以上版を重ね読み継がれている本です。図書館にある本ももうぼろぼろです。

「日本の思想」「近代日本の思想と文学」「思想のあり方について」「『である』ことと『する』こと」の4章からなっていますが、このうち最後の「『である』ことと『する』こと」の一部は国語の教科書の定番的な教材になっています。二年生が今年使用している教科書にも載っています。教材になっている第4章が一番読みやすいので、まずこの章を読むことをおすすめします。1冊全部を読み通すのにはかなり苦労すると思いますが、たとえわからなくても一通りは目を通して見て、また別の機会に読み返してみるのがいいでしょう。僕自身も高校時代にこの本を通読したけれど、特に第1章はとてもむずかしく感じたのを覚えています。難しい本を読むのは初めのうちはしんどいけれど、どんどん読んでいくとしだいに読めるようになってきます。読書に限らず、勉強でもスポーツでも、楽器の練習でも同じような事情があるのではないのでしょうか。

⑦ 亀山郁夫『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する(光文社新書)

【983/K3/1】

筆者による、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の新訳(光文社古典新訳文庫全5冊)は最近の出版界の「事件」といいいいような出来事でした。ドストエフスキーの翻訳は数多くありますが、訳されてから何十年もたち、高校生の諸君には読みづらいものが多いようです。せっかくの名作も読まれなくては意味がありません。筆者による翻訳はドストエフスキーの作品世界に対する深い理解の上に立った画期的に読みやすい翻訳として高く評価され、異例のベストセラーになりました。

ドストエフスキーの作品は『罪と罰』『白痴』『悪霊』『未成年』等々、長編が多く、読み始めるのに勇気がいりますが、一度はまると夢中になって次々と読んでしまいます。僕も大学1年の夏休みにドストエフスキーの長編をほとんど読みました。その中で一番心を揺すぶられたのは、実は、上に挙げた五大長編ではなく『死の家の記録』という作品でしたが、これは政治犯としてシベリア流刑に処せられた作者の体験と見聞を記録したもので、ドストエフスキーの最高傑作だという人もいます。

さて、前置きが長くなりましたが、周知のように『カラマーゾフの兄弟』は未完の作品です。現在我々に残されている『カラマーゾフの兄弟』を出版してまもなく作者は亡くなってしまいますが、実は、作者は「正編」執筆中から続編を構想していました。本書は、現在残されている文書・証言など、さまざまな手がかりを元に作者の意図した「続編」がどのようなものであったかを推理したものです。「続編」とのつながりを知ることで『カラマーゾフの兄弟』の世界はより広くより深くなるはずです。

⑧ 辛淑玉「悪あがきのすすめ」(岩波新書)【914/S50/1】

元気が出る本です。いっぱい笑い、泣くことができます。

この人は、生きるため、生きのびるだけのためにぎりぎりの技術を必要としました。その結果として彼女が会得したのが「悪あがき」という哲学でした。どんなに苦しくてもどんなにひどい目にあっても絶対へこたれない。じたばたする。やれることは何でもする。そうすることで初めて道が開けたのです。

女で朝鮮人で学歴がない(小学校すらまともに出ていない)という、日本の社会の中で一番弱い立場にいた彼女が、現在は大学で教えたり、企業の社員研修などをする会社を経営したり、政府や自治体の委員をしたりしています。それは、彼女が決してあきらめず悪あがきを続けた結果なのです。

同じ著者の『せっちゃんのごちそう』『鬼哭啾啾』(どちらも図書館にあります)とあわせて読むと興味が増しますよ。